

「大学暮らし 17 年」

社団法人国土政策研究会専務理事

小浪博英

(本稿は「旧交會會報」第 46 号に掲載されたものです。)

終わりました。53 歳から 70 歳まで、フィリピン大学、東洋大学、東京女学館大学、帝京平成大学、思ったよりも短い 17 年間の大学暮らしが終わりました。

52 歳の時、土木研究所研究調整官という素晴らしいポストをいただいたのが始まりでした。つくばの単身寮に入り、夜間は在職中に勉強していた駅前広場で学位をいただくための論文を書き、日中は土研の 3 階で阪神淡路大震災の記録作りと北海道でのトンネル崩落事故対策で明け暮れ、とても忙しい 1 年でしたが、3 月には無事に学位をいただき、4 月から教授生活が始まったのです。受講生総数はフィリピン大学で 1 年間に約 100 名、東洋大学では 7 年間で約 5,000 名、東京女学館では 4 年間で約 800 名、帝京平成では 5 年間で約 4,000 名でした。実際には同じ学生が私の授業をいくつも取ってくれましたので、個人別実数はこの半分以下の 3~4 千人ではないでしょうか。

最初の赴任地は大臣官房に籍を置いたまま、JICA 専門家としてのフィリピン大学客員教授。所属は工学部の大学院とアジア観光研究所。工学部の大学院では交通計画を、アジア観光研究所で学部の 3 年生に観光交通計画を担当しました。特に印象に残っているのは観光の学生で、40 人のクラスのうち 35 人が女学生。この学生が食い入るように見つめてくるので慣れるのに大変でした。学期の終わりのアンケートで「私は 3 つびっくりした。ひとつは最初に教室に入ったら、そこに日本人が立っていたこと。二つはその日本人が英語をよく話すこと。三つは、まるで噴水のように私たちの知らないことを話してくれること。」とのことでした。これには感激でした。退任時には学長が竣工したばかりの迎賓館で送別会を開いてくださり、「いつでも戻っていらっしやい。」との暖かいお言葉をいただきました。

次は東洋大学。埼玉大学から移ってきてくださった赤塚雄三先生と一緒に、渡良瀬遊水池にほど近い群馬県の板倉町で国際地域学部国際地域学科を新設することになりました。群馬県の施行したニュータウンと東武鉄道が新設した板倉東洋大前駅はあるのですが、駅前には空き地だけ。それでも偏差値の高い学生が集まってくれて楽しいひとときでした。何年かして国際観光学科を新設しようということになり、私と故佐々木宏茂先生が準備委員。東洋大学短期大学にある観光学科を廃止して、それを 4 年制に改組しようということになりました。もともと観光は昭和 30 年代に立教大学と東洋大学が学科を設置して、日本ではこの両者が草分け的存在になっていました。とはいえ短大は白山なので、これを板倉に持つてくるのですから、校舎の増築、先生の確保、学生募集と貴重な経験をさせていただきました。今ではその国際観光学科が日本の観光分野で中心的な位置づけとなり、偏差値も東洋大学内でトップクラスになっています。嬉しいことです。

そうこうするうち、澁澤家四代目の澁澤雅英様（当時東京女学館館長）から短大を 4 年制にするので来ないかとお誘いがあり、名門女子大の教授、誰でも一度はやってみたい仕事。不肖私も直ちに意を定め、後ろ髪を引かれつつも南町田の東京女学館大学に移りました。教授室は東洋大学時代の 3~4 倍はある広い部屋で、のどかな 4 年間でしたが、残念ながらアジア・アフリカで一番の女学校にしようと思った私の夢はあっけなく消え去り、本年からは募集停止になってしまいました。しかし、とにかく女子大で 4 年間、なんとも楽しいときではありました。女学館には 68 歳まで居るつもりだったのですが、経営の不振と入学生の定員割れのため 65 歳で辞めてくれないかとのこととなり、丁度そのとき帝京平成大学が観光系の学科を新設するので学科長で来てくれないかとの話し。直ちにのることに致しまし

た。学科の名前はレジャービジネス学科です。私としては単純に観光学科が良いと思っておりましたが、学主でおられた沖永庄一先生が決めたことだから変えられないとのこと。仕方なく従いましたが、場所が市原市の潤井戸という山奥であったこともあり、4年間定員割れの連続。大体、レジャービジネス学科というだけで、お母さん達が「そこはやめておきな」ということになるのだそうです。本年4月からは学科名を観光経営学科としてキャンパスも中野駅前に移しましたら、たちまち定員を満たすことはできましたが私は70歳。中野にご一緒することはできませんでした。

17年間を通じての私の印象ですが、フィリピン大学は本当に勉強したい学生の集まりで、フィリピンのエリート集団でもあり、私の方がたじたとするようなこともありました。その他の国内3大学は問題無しとはしません。まず第一に、半分くらいの学生の行儀が悪すぎることです。小学生でもないのに授業中にトイレに立ったり、突っ伏したり、私語が多かったり。私はその都度叱るのですが、他の多くの先生は我慢をしてしまうのです。第二に、学生が勉強をしないこと。教科書も買わない、授業も三分の二くらいは欠席、もちろん質問も追っかけも何もない。コンパでもしようかと思ってもバイトで学生の方が忙しい。第三に、昔の文部省の影響だと思うけれど、事務部局の頭が非常に保守的であること。昔の文部省は部下が上司に意見を具申することは御法度だったそうですが、その雰囲気は大学には未だに残っていて、これが教員との間の摩擦にもなっているのです。また、文科省のご指導でしょうけれど、やたら雑用が多いのです。研究成果の報告、ご父兄との面談記録、出張報告、各種委員会（総務、教務、学生、FD、図書、環境、マナー等々）、伝票管理、授業資料の作成・印刷など、およそ自分の時間などは無いのです。昔のように教授室の前には事務職員がいてくれて、伝票や報告は全部やってくれていたのがまるで夢のようです。第四に、休講を認めないことです。一学期間にきっちり15回の授業を義務づけてくるのです。万一学会等で休講すると、必ず補講をするように言われるのです。レポートの課題を出しておいて、その提出で置き換えることなどは今はできないのです。昔は自分が別用をして助手や院生に授業をやらせても何でもなかったのに。要するに自分の時間は持てない、ゴルフにも行けないのが今の大学なのです。

以上のような状況ですから、学生もきついのでしょう。これでは大物は育たないこと請け合いです。先日テレビで、親が子供にやってあげるべきことは、「姿勢をただすことを教えなさい」といっていましたが、確かに歩く姿勢、座る姿勢、それに加えて綺麗に字を書かせること。これと、もっと自由な大学生活が送れば、それだけで子供は立派な日本人になれるかもしれません。もちろん高卒の半分が大学に来る現在では、その多くが落ちこぼれるのでしょうか。

これからしばらくは岩井國臣会長のもと、社団法人国土政策研究会でお国のために微力を尽くしたいと思っております。よろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。